

日本語を母語とする場面緘黙児における言語能力の特徴 一個別式言語検査を用いた検証一

高木潤野(長野大学 社会福祉学部 准教授)

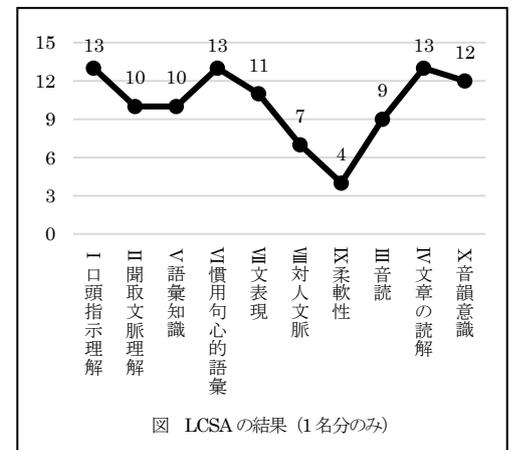
場面緘黙とは、話す能力を有しているにもかかわらず、学校などの特定の場面において話せなくなってしまう状態のことであり、DSM-5では不安障害に分類されている。場面緘黙状態は単一の要因により発現するものではなく、多様な問題が背景にあることが指摘されている。このような場面緘黙状態発現の要因の1つとして、言語能力の問題があることが指摘されている。

筆者らは2016年度に助成を受けた研究において、保護者記入型の言語・コミュニケーション能力のチェックリストであるCCC-2(Children's Communication Checklist-2)を用い、日本語を母語とする49名の場面緘黙児を対象に言語能力を評価した。その結果、対象とした場面緘黙児49名中30名(61.2%)には何らかの言語障害(構音障害、吃音等)や言語能力の低さが見られることが明らかになった。この研究で用いたCCC-2は保護者回答型の簡易な検査であり、回答者の主観に左右されやすいことや、評価項目の中に場面緘黙の症状にあてはまる項目があり言語能力の評価にならないといった点が課題として挙げられた。このため、場面緘黙児の言語能力の問題を明らかにするには、個別式の言語能力検査を用いた調査が必要であると考えられた。このことを踏まえ本研究では、個別式の言語検査LCSA(学齢版 言語・コミュニケーション発達スケール)を用いて、場面緘黙児の言語能力の特徴を明らかにすることを目的とした。場面緘黙児を対象とする検査にあたっては、話しことばの表出が抑制されることから実施が困難である点が課題として挙げられる。このため本研究では、時間をかけて対象児と信頼関係を形成することで、まず音声言語の表出が可能となる状態となることを目指した。

知的障害がなく日本語を母語とする、場面緘黙児を主訴とする小学生6名を対象とした。言語能力、場面緘黙の程度、ASDの有無、知的障害の有無、成育歴や学校での状況等、についての情報を個別に収集した。言語能力の評価については、①個別式児童遂行型のLCSA(学齢版 言語・コミュニケーション発達スケール)、②保護者記入型のCCC-2(日本語版 子どものコミュニケーション・チェックリスト第2版)、③指さしで回答可能なPVT-R(絵画語い発達検査)を行った。調査はすべて個別に実施した。検査者(共同研究者:臼井)と対象児との個別の遊び活動を通じて信頼関係を形成し、音声言語によるコミュニケーションが可能となった後に検査を実施した。

本研究の結果、以下の点が明らかになった。(右図はLCSAの結果のうち対象児1名分のみを表示)

- 1) LCSA 指数については6名中5名は顕著な遅れは見られなかった
 - 2) 6名中5名は評価点が1標準偏差未満(6以下)の下位検査が存在した
 - 3) 下位検査が1標準偏差未満である項目は対象児ごとに異なっていた
 - 4) 「IX柔軟性」については4名が1標準偏差未満であった
 - 5) リテラシー指数(音読、文章の読解、音韻意識)は、6名全員が80を上回っていた
 - 6) LCSAとGCC、PVT-Rの結果はいずれも高い相関を示す傾向が見られた
- これらの結果から、言語能力全般として見ると顕著な遅れがないように捉えられる場合であっても、場面緘黙状態の発現には何らかの言語能力の弱さに関わっている可能性があることが示唆された。また、言語能力のどのような側面に弱さがあるかについては、個々の場面緘黙児によって詳細は異なっていると考えられた。その中でも、「IX柔軟性」が低い者が多かったことから、状況に応じた柔軟な語の選択や思考の苦手が、場面緘黙児の緘黙症状に寄与している可能性が考えられた。一方、リテラシー指数は6名全員が80を上回っていたことから、読み書きに関わる力については場面緘黙児の多くは比較的得意としている可能性があることが考えられた。



また、保護者記入型の質問紙であるCCC-2の結果がLCSAと相関があることが示されたことから、CCC-2は場面緘黙児のアセスメントの手段としてある程度有効であると考えられた。

本研究の課題として、被験者が6名のみであったことが挙げられる。またすべて女兒であったことなど研究対象の偏りもあり、本研究で得られた結果が場面緘黙児全般の傾向としてどの程度一般性があるかは疑問が大きい。今後さらにデータを増やすことによって、同じような傾向を示すグループがあるかなど、言語能力の特徴について検討していきたい。

(共同研究者:臼井なずな)